

静狩湿原

彦 和 像 宗

本文の要旨

静狩湿原は大正時代に泥炭形成植物群落として天然記念物に指定され、第二次大戦後の日本の産業経済振興の流れのなかで解除され開拓された。半世紀後の現在その一部は未だ農地化されず泥炭地形成植物群落の様相をとどめている。湿原環境の価値認識が深まった現在、その地の保存の可能性を求めて、湿原要素の総合調査診断を早急に行う必要がある。

一、記念物指定と解除・開拓

JR室蘭本線の長万部から静狩にかけての沿岸に、東側(海側)に海岸線に沿って続く砂丘帯、西側(内陸側)には奥に望む万部山塊裾から海岸砂丘地まで広がる、静狩原野と呼ばれる平地がある。(車窓からの視界は針葉樹の防風砂林によって遮られ、原野の一望はできないが)

この原野は、地質時代の完新世に入る頃からの海退によって生じた低地で、これに後背山地から流下する河川水が海岸にできた砂丘帯にせき止められて形成された湿地原野である。

この地域の表層は湿原堆積物であり、低位、中間、高位の各泥炭地の分布が知られている(地質図、一九八三、地質調査所)。

この地の昭和初期の状況について「長万部村郷土誌」(昭和十年代初)のなかでは、「海岸に沿う低い固定砂丘を横切ると、まずそこに沼沢がある。この沼は植物学上極めて興味深いもので、内に幾多の浮島がある。この沼を渡ると広い泥炭地に入ることができる。外縁は現在放牧場になり、諸所にヤチダモの大木がある。その間には灌木が集まっ

て生え、草むらをなしている。この草原を過ぎると水藓泥炭地で、外部にはヤチスゲ、ミタケスゲ、クロハリイ、ワタスゲ、ホロムイスゲなどが最もよく繁茂し、その間にところどころにトキソウ、コバノトンボソウ、コアニチドリなど可憐に咲いていて、蘭科植物をさがすことができる。

そこにはまた諸所に水藓が群生し、多くの泥炭地植物を蔵している。ヨシの茂っている所も多く、こういう所にはミツガシワが多く、湿潤地では足が沈み、なかにはいるにしたがって深くなり、体をゆすると周囲まで振動し、危険で進むことができなくなる。乾燥時は草原状になっているが、ひとたび雨が降ると全部沼沢に化し、これらの植物はわずかに地表を覆っているにすぎないので、こういう所を渡るのには危険であって里人もはいらない。このような沼沢原野はこの地域の諸所にあり十数町歩におよぶのもめずらしくない。：泥炭地のなかをさらに東へ進むと、水藓の生育が最もいい所がある。夏その一隅に立つと、広々とした泥炭地は淡紅色の毛氈を敷いたようである。：モウセンゴケも近くから観察すると単調に繁殖しているものでない。水藓群落を覆うモウセンゴケ群落には高低があり、大小の差異とともに千差万別の状をなしている。：モウセンゴケ群落内に著しいものとしてヤチスギランのような石松類がある。サワラン、コアニチドリ、トキソウなどの美しい蘭科植物もある。またホロムイイチゴは白いバラ状の花を咲かせ、ガンコウラン、ツルコケモモのような泥炭地特有の植物も多く、その他ヤマドリゼンマイのような羊歯類もイヌツゲ、ホロムイツツジ、ヤチヤナギなどの灌木とともに点在し、これらの緑がモウセンゴケの淡紅に調和し、他に求

むなかた・かずひこ

1933年、函館生まれ
北海道学芸大(函館)卒業、
教職につき退職
南北海道自然保護協会会員
(理事長)、北海道自然保護
協会会員(理事)

めることのできない景観を呈している。」とあり、当時この原野は、渡島地域としては規模の大きい高層湿原地域であったことを知る事ができる。

この地の泥炭地植生は、学術上の貴重さから保存の対象となり、泥炭地域の約五十%の面積が一九二二年（大正十一年）に天然記念物の指定を受けたが、その後、時の変遷のなかで昭和二十年代半ばに指定が解除され、開拓の手が入り農地化が図られ現在に至っている。

天然記念物指定の名称、期日、面積等については、「北海道の史跡名勝天然記念物」（一九四九北海道教育委員会編）によると次のようになってい

「静狩泥炭形成植物群落」

大正十一年十月十二日 文部大臣指定

所在地 北海道山越郡長万部町字静狩

指定区域 三百九十七町二段二十一歩七合

管理者 北海道教育委員会

尚、この指定期日は霧多布泥炭形成植物群落、ヒノキアスナロ及びアオトドマツ自生地（江差町）の天然記念物指定と同期日である。しかし長万部町史（一九七七）には大正十三年とあり、その事由の経緯は不明である。

次いで、この地の指定解除と開発について、長万部町史（一九七七）では、昭和二十五年一月に町長が上京し原野開発の具体化のため各関係機関と折衝、同年四月地元で開発期成同盟会を組織、七月から八月にかけて農林省、道庁、支庁の関係者の現地調査、開拓道路や農道の位置選定の測量と経費算定、などを経て開拓建設工事は昭和二十六年着工に決定、昭和二十六年五月二十一日に起工式、昭和二十九年十月二十六日に竣工式を行っ

たとあり、開発経過は克明だが「記念物指定や解除についての詳しい公的文書は町に保存されていない」として、解除にあつたての経過とその期日等は町史からは知ることができなかった。

ただ地元の開発機運が具体化していた昭和二十五年四月十六日、当時北大教授の館脇操先生が道教委職員と現地を訪れている。

その際の先生の意向として、「一度に解放することは困難であるが、最小限度必要な面積を考慮する。」七月月上旬に再調査する。」とのことが伝えられたというが、以降に再調査がなされたという記録はないとのことである。

当時の国土開発に関する公機関の姿勢から、この時が開発を前提にした管理者の形式的な調査視察であつたとも憶測される。

それを裏付けるかのように、館脇先生の調査来訪の一ヶ月後の五月半ばに道庁による予備調査、六月に土壤調査、地形測量、経済調査等が行われていて、指定天然記念物について、その維持保存に関する十分な審議の間をおくことなく、開発を優先促進させた歩みが見られている。

町史のこの項の著者は、「泥炭植物の景観で語られた土地の上で行われたこれらの調査（六月以降の調査のことと思われる）は、自然をそのままにしておくためのものではなく、自然に人工を加えて別の状態を作り出そうとするものであつた。戦争で領土を失った日本にとって、食料増産や失業人口の収容は、さしあたり対処を必要とする問題であつた。

一部の研究者や観光のための自然を保存することより、国費を投入しても開拓事業の実施を選ぶのが国策であり、住民の志向するところでもあつ

た。静狩原野の開拓はこの時期を外していれば、再び機会がめぐってこなかったのではないかと思われる。」と記している。

開拓の概要は、対象面積約一、九四〇ha、排水路十三本延長約十七km、開拓道路延長約七・四km、農道十五本延長約二十四kmで、工期は昭和二十六年五月の着工から昭和二十九年十月の竣工までの三年数ヶ月であつた。

入植は昭和二十五年十二月に受け付けを始め、工事の完了時期までに一二二戸が記録されている。

このように静狩原野内の天然記念物地域は、「湿原地は生産に結びつかない荒地であり、開拓すべきは当然」という半世紀前の一般認識のなかで、敗戦後の国情とそれに対処する国と地方自治体の対応策、更に地域民の志向等により、その地がもつ学術価値よりも開発による産業・経済の効果を期待した事業のなかで消去されていった。

今車窓から防風林の間をぬって望まれる原野の光景は、広々とした平原のなかに牧舎とそれを囲む放牧地や牧草地、畑作地などが目に映り、一見するとところ開拓が成功し、原野が農耕や牧畜の良好地へと改良された地域として目に入る。

しかし、海拔五m程の低地があり、また向背山からの流入水が多いこの原野の排水は容易でなく、その後の排水と土地改良の施業にもかかわらず、五十年を経た現在、入植者が農業地としての採算に見切りをつけて放置状にある地、また離農により農地化が中断放置された地なども多く見られている。

そのなかには、排水による水位低下で乾燥が進み周辺にスキヤササの侵入があるものの、谷地坊主や地塘の姿があり、ミズゴケ、ワタスゲ、モ

ウセンゴケ、ミツバオウレン、ツルコケモモ、ミツガシワなどの生育もみられ、かつての泥炭地植生の片鱗を止める地も残されている。

近年、湿原がもつ生物環境、水環境、気候環境などの面での価値認識が深まるなか、小規模ながら残存する静狩湿原の保存に関心を寄せる声も聞かれるようになった。

二、湿原地のようす（植生の概略）

今年（一九九九年）九月七日、開拓原野に残るこの湿原地域を訪れたが、その際にみた植生の概況は次のようであった。

現在、湿原植生が残存する地は写方部山塊東端のオモタイ山の麓、開拓十号と十三号農道の間にあつて、部分的に耕作地も存在するが全体としてヨシとスキが優占する湿地原野の景観を呈している。

その中でも、十一号農道と十二号農道に挟まれ、四方を排水溝に囲まれた約十八ha（三〇〇m×六〇〇m）の区画地には、ミズゴケを基盤とした湿原植生が残されていて、大小の地塘が散在し谷地坊主の形成もみられている。

地塘とその周縁では挺水状にミツガシワ、カキツバタ、浮葉状にオヒルムシロ、ヒツジグサ、ネムロコウホネ、水辺のミズゴケ密集地にはツルコケモモ、コケモモ、ミツバオウレン、モウセンゴケ、ヤチスギラン、さらに水辺から後退した地にはワタスゲ、サワラン、トキソウ、アギスミレなどの生育がみられる。しかし散在する地塘のなかには融雪期や降雨量の多い時期には水溜りとなるが、降水の少ない時期には溜りがなくなるものもあることが、水の溜りのない窪地にミツガシワや

ミズゴケが生育不良の姿でみられることから推察できる。幾つかの地塘にみられるこの状況は、排水による水位低下が起因とも考えられる。

地塘をつつむ草原地では、特に周辺部で排水による乾燥化にともない湿原植生から高茎草本と低木からなる植生への移行の過程が認められるが、広い範囲に均一な密度で存在しているヤチヤナギとハイイヌツゲの湿地性低木叢、そのなかに部分的に混じるイソツツジの群叢、それらの下層に散生しているヒメシヤクナゲ、コケモモ、また草本としては全域にサワギキョウ、ミズバシヨウ、タチギボウシ、エゾカンゾウ、ノハナシヨウブ、ワタスゲ、ホロムイソゲやヤマドリゼンマイなどがみられていて、かつての湿原植生の姿をとどめている。

しかし、乾燥と腐葉土の堆積が進んだ地を選んで、周辺とくに山側（東側）から木本類とササが粗ながら生育域を広げつつあつて、ヤマウルシ、ノリウツギ、ミツバウツギ、ハンノキ、ヤマハンノキ、シラカバ、ダケカンバなどが一〜数mの樹高で矯生状を呈して散生し、更に乾燥が進んだ地にはノイバラ、タニウツギ、ヤマハギ、イヌコリヤナギ、キツネヤナギなどの低木やエゾニユウ、オオイタドリ、マルバトウヒレン、スキなどの高茎草本が、またその中でも比較的潤な地ではヨシ、アブラガヤなどの高茎草本が旺盛に生育するのがみられている。

この植生の現状は、この区画も徐々に水位の低下が進行し周縁部から乾燥による草本・低木群叢が進み、将来的にこの地の湿原植生も姿を消失させることを予測させている。

一九八九年（平成元年）七月にこの地を訪れた

際には、農道と排水溝を挟んで東側（内陸側）に隣接する区画地も地塘や谷地坊主があり湿原植生がみられる地であつたが、現在、周縁にオオイタドリが繁茂し中央部はヨシ原、やや乾燥した地はスキ原となって大きく変貌していた。

その地は、現在まだ湿原植生を残す地からみてやや地標高が高く、排水効果の大きい地であるためとも考えられるが、水位低下の進行程度に時間的な差こそあれ、今まだ湿原植生を保つ地域の将来姿を現実のものとしてみせている。

三、保存に関する課題

近年、湿原環境のもつ要素や機能が多方面において価値あるものとしての認識が高まり、小規模ながら現存するこの湿原地域の保護存続を望む人々も多くなっている。

しかし、この湿原地の保存にむけては、この地の実状・現状から次の基本的な課題について検討が必要と考えられる。

(一)、対象地は開拓地内の一もしくは数区画であり、また個人に分筆された地所であることから、公共地（もしくはそれに準ずる地）への変更処置に可能性があるか。

(二)、地権に関する問題解決の可能性の是非（生育種や植生概観は高層湿原の様相を現存させているが、排水による水位低下で乾燥方向に植生遷移が進んでいることから、これからの保存処置で、回復、現状維持もしくは延命の可能性があるか。

(三)については、対象地及びその周辺地の所有者の確認と所有者個々の意向などの掌握が必要であり、これには地域行政機関（長万部町）の協

力が不可欠であり、(二)のことには、対象地の現況についての関係分野の専門家(研究者)による綿密な総合診断が必要である。

また(一)と(二)の結果で保存の可能性がみえた場合、その具体化にむけての土地取得対策、保存への諸企画と施業、その後の維持管理(含活用)、更にその全てに関する予算処置等について、関係する公機関(国、道、長万部町)の対処に大きく期待しなければならぬ。

これらを考えるとき、この地の保護保存について、即実現へと進むことには難点が多い。

しかし、現存する地は以前より縮小したとはいえ、道南としては広面積規模である。また詳細な資料は今手元にはないが目される鳥類や節足動物(特に昆虫類)には、道南としてこの湿原と密接な関連をもつと考えられる種もあると聞くことから、生物相要素からみたとときこの湿原の存在は意義深い。

これらのことから、この湿原地のもつ湿原環境とその要素についての現状調査とその総合診断を早い時期に実施し、保護保存の意義と可能性が認められた場合には、刻々と湿原環境要素の消失が進行していることから、後に対策手後れの評を残すことなく、敏速に且つ適切な保存対策を関係機関に求めるべき地域であると考える。

今年九月の湿原訪問の折りには、この地の高校に赴任以来この湿原に強く魅せられて退職後もこの町に居を置き、数十年にわたって湿原の移り変りに触れて、貴重な研究資料を蓄積されてきた薩川益明氏にご案内をいただくことができた。

薩川氏には「オシヤマンベ花散歩」(一九八五長万部文化協会)の著書もあり、地域の自然につ

いて造詣の深い方であることから、この湿原についても多くの知識を拝受し、また貴重なご意見も拝聴できた。その中で、この湿原についての総合的調査の必要性を強調し、実施の要望があった。

「現状についての資料は、湿原が仮に消失の運命にあるとしても、それはそれで残された記録は貴重な財産(遺産)の記録である」と。

訪れた湿原地内には、ミズゴケや湿原植物の堀跡が、新旧混じって各所にみられた。薩川氏によると花の季節には訪問客が多く、集団のときはその踏みつけによる被害も大きいという。

尚、この地域は第三回自然環境保全基礎調査結果、特定植物群落と指定されている。

(対象番号二〇五、面積一〇〇ha、基準D・H)、保護保全地とすべきか否かの診断を急ぐべき地域である。

主なる参考・引用の資料

北海道の史跡名称天然記念物(一九四九)

北海道教育委員会編

長万部町史(一九七七) 長万部町

新北海道史年表(一九九二) 編纂北海道

生態学からみた北海道(一九九三)

東 正剛・辻井達一編

長万部地域の地質(一九八三) 地質調査所

現存植生図・長万部(一九八一) 環境庁

特定植物群落調査報告書(一九八八) 環境庁

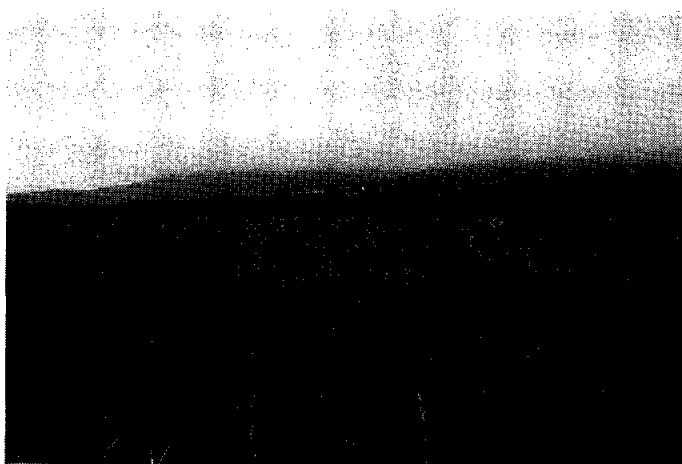


写真1 湿原草地、手前周縁部は高茎草本が優占 99年9月

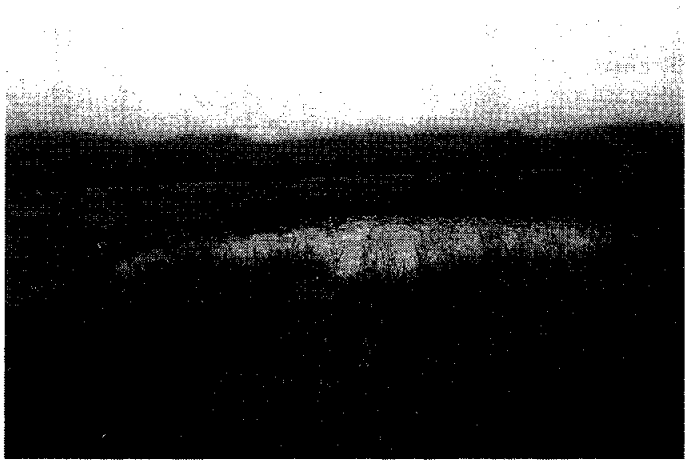


写真2 地塘の一つ 99年9月



写真3 地塘の水岸、ヒツジグサが咲いていた 99年9月



写真4 谷地坊主、ミズゴケ塊の上にヤチヤナギやハイイヌツゲの稚樹、ミツバオウレン、ツルコケモモなどがみられる 99年9月



写真5 ヤチスギラン 99年9月



写真6 乾燥が進む地塘にヨシが侵入 99年9月

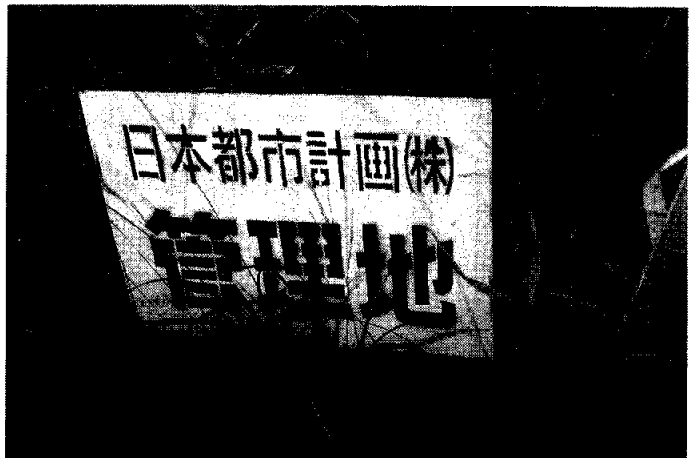


写真7 付近の離農放置状の区画に立つ看板 99年9月



写真8 ヤチヤナギ・ハイイヌツゲ叢（手前） 89年7月



写真9 アギスミレ（中央） 89年7月



写真10 サワラン（中央）、盗掘が多く減少していた 89年7月